＜中学生部門　公衆衛生賞＞

高齢者の「デジタル格差」から見えたこと～僕らの当たり前を押し付けないために～

新型コロナウイルスの影響で、僕らの学校生活はことごとく制限されてきた。対面授業に戻ってからも、授業中はマスク着用、昼食は黙食、合唱やリコーダは禁止、遠足や修学旅行は中止など挙げればきりがない。だからマスクから解放された今年の夏休みは、友達との旅行や部活の合宿に出掛け、やっと取り戻した日常を楽しむことができた。

一方、制限下だったからこそ急速に普及したこともある。それはネットショッピング、オンライン会議や授業、オンライン診療といったインターネットによる生活支援や医療サービスだ。重い食料品や嵩張る日用品が玄関先まで届くネットショッピングは便利だ。近くで買えない医薬品や医療器具まで注文できる。オンライン授業も定着した。僕の学校でも全員タブレットを使い、休校時や長期欠席者がいつでも授業を受けられる環境が整っている。塾も対面または動画配信を選択でき、もはや画面越しでの生活が当たり前の時代となった。オンライン診療も活用している。コロナ前は、耳鼻咽喉科に毎月通院し、アレルギーの舌下免疫治療薬を処方してもらったが、今はオンライン診療後に医師が最寄りの薬局へ処方箋を送信し、希望すれば自宅まで薬が届く。ワクチン接種やたまに受診する皮膚科や眼科も来院日時をネット予約し、事前に問診票を入力すれば、待ち時間なく受診できる。しかし、こうしたインターネットによるサービスの恩恵にあずかれるのは、経済的にも社会的にも恵まれた比較的若い世代に限定されることを最近知った。

近所に住む祖父母の冷蔵庫に貼られたカレンダーを見て驚いたことがある。祖父（８９歳）の７月最終週は、月・木曜日がリハビリ、それ以外が内科、泌尿器科、眼科と通院だらけだったのだ。聞くとそれぞれ高血圧、前立腺肥大、ドライアイの処方箋を１カ月分貰うためだと言う。難聴で足腰が弱っている祖父には祖母（８４歳）の付き添いも必要だ。ただ薬を貰うだけのために、彼らが連れ立って病院と薬局を何度も行き来するのは余りにも効率が悪い。僕が「通院先を１つにまとめるとか、オンライン診療にしたらいいのに。自宅に薬を届けくれて便利だよ」と提案すると、通院先のまとめ方が分からないし、オンライン診療を利用したくてもスマホ操作が分からない、詐欺に遭いそうでクレジット決済が怖いと言う。当然、ネットショッピングもできない。彼らは検索したり、撮った写真や動画をメールやラインしたりとそれなりにスマホを使っている。しかし、彼らの在宅生活や健康維持に最も必要なオンライン診療などのサービスがせっかく目の前にあるのに、アクセスすらできない状況はとても問題だと思う。

内閣府の統計を見ると、スマホやタブレットをほぼ利用しないか利用したことがない高齢者は７０歳以上で約５８％、その理由は必要性を感じないが５０％、使い方が分からないが４２％だった。使わないとその必要性や利便性に気づかないだろう。こうした高齢者の「デジタル格差」を解消し、生活の利便性や質を高めるためにはどうしたらいいだろうか。それにはインターネットの利用程度に応じた段階的な対策が必要だと思う。まず経済的に購入できない高齢者には、行政が助成や貸し出しをする。次に基本的な操作ができない場合は、教室や講師派遣で機能を慣れてもらう機会を提供する。さらに僕の祖父母のように基本的な操作はできるが、オンライン診療などのサービスを利用する方法が分からない場合は、初期設定を家族や医療介護スタッフが代行する。実際に利用する段階では、必要書類の添付やデータ入力ができない、回線に接続できない、音量調節できない、支払い決済できないなどのトラブルも発生する。家族の協力が得られない場合は、ホームヘルパーなどが付き添う必要もあろう。最も理想的なのは、複数の病気を抱え、通院先が複数にまたがる場合、「総合診療医」のような存在が各専門医と連携し、対面診療であろうとオンライン診療であろうと『まとめ役』を担う効率的な体制が整うことだ。通院先が減れば、家族の付き添いも必要最低限になり、肉体的にも金銭的にも無駄がなくなるはずだ。

こうしたインターネットによる生活支援や医療サービスは、離島や医師が偏在するへき地だけでなく、外出困難な高齢者や障害者が多く住む都市部での需要も高いが、活用するには周囲のサポートが欠かせない。また、どんなにインターネットが普及したとしても、顔なじみの医師との対面や訪問診療を希望する人もいる。買い物も同様だ。将来的には、地域に暮らす誰もが分け隔てなく、その人に最適な生活支援や医療サービスを、その人の意思を尊重して自由に選択でき、簡単に確実に利用できる多様性に富んだ社会になることが理想だ。そのためには、僕らの当たり前が他の誰かにとっては当たり前ではないことに気づくことが大切だと思う。

【講評】

デジタル格差という一見すると気付きにくい健康課題の解決のために、市民の多様性を尊重している点を評価しました。中高生である自身の当たり前が全ての人の当たり前でないという視点をこれからも大切にしてほしいです。